

● 事例 ●

お茶の水女子大学ピアサポート体制の事例紹介

— 全学的取組と留学生支援を中心に —

加賀美 常美代

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授)

1. ピアサポート・プログラム体制の経緯

学生支援には専門家による援助と非専門家による援助がある。ピアサポートは、後者のカテゴリーで、大学においては学生による学生のための援助である。

お茶の水女子大学は、一三五年の歴史と伝統をもつ女子大学で、平成二一年度五月のデータでは二九八四名の学生が在籍している。そのうち二一六六名が、文教育学部、理学部、生活科学部に、八一八名が大学院人間文化創成科学研究科に所属している。このように小規模大学であるがゆえに学生同士、教師と学生との距離があまりなく、お互

いに交流しやすい土壌がある。そのため、学部や講座等で、それぞれの学生のニーズに応じて、様々な形で学生による学生のための援助が内発的におこなわれ、そういう活動には教員が指導しながら関わってきた。

こうしたお茶の水女子大学の学生同士の相互交流の伝統を根付かせ、開花させていきたいという思いのもとで、二〇〇四年度から、全体のピアサポート・プログラムの取り組みとして位置づけようという機運が起った。学生支援を主体に全学ピアサポート連絡会議が発足し、当時の副学長が各学部、留学生支援のピアサポートを担当する教員を招集した。筆者は、留学生支援のピアサポート担当者

であるとともに、発足当時の二〇〇四年から現在まで学生支援室室員として、全学ピアサポート連絡会議リーダーを継続し担当してきた。

当時の副学長が招集した背景には、上記のお茶の水女子大学の伝統的なアットホームな交流の蓄積を継続させることだけでなく、二〇〇〇年に文部省（現文部科学省）高等教育局より「大学における学生生活の充実方策について」が提言されたことにある。つまり、「学生中心の大学」への視点を転換するとともに、「正課外教育の積極的な捉え直し」が提唱され、学生による学生の支援の有効性が見直されたという経緯がある。

しかし、お茶の水女子大学では、既に述べたように、大学の各学部や組織内でピアサポートという言葉は使用されてこなかったものの、実態として学生による支援活動が様々な形で出来上がっていたため、トップダウンで新たなピアサポート・プログラムを策定する方策を取らずに、これまでの組織の実践を「ピアサポート」という共通理念で共有し、連携をしていくように、各組織が「ゆるやかな関わりと連携」をめざすことにした。つまり、それぞれの組織（学部等）の学生支援の目標、方法、支援体制など個性、独自性を尊重しつつ、大学全体のピアサポートとして

共有していくこと（加賀美、二〇〇五）にしたのである。

2. お茶の水女子大学全学ピアサポートの概要と特徴

全学ピアサポートの組織（各学部・留学生）の概要・特徴については、表1で記したとおりである。詳細の実践例は、二〇〇五年、二〇〇七年、二〇〇九年度に発行したそれぞれの報告書を参照していただきたい。

表1のとおり、各学部の学習支援を中心としたピアサポートのシステムは、先輩から後輩への支援というかなり構造化されているのが特徴である。一方、留学生のピアサポートについては、留学生相談室は大学院チューターが日常的に常駐しており、最も構造化されている。しかし、国際交流グループTEAの活動は、学生の主体的交流が中心で、ボランティア活動として行われているため、流動的で自由度が最も高く、構造化されていない。

3. 全学的な活動内容

以上述べてきたように、各組織のそれぞれの取り組み以外に二〇〇四年以来、全学のまとまりや組織間のコミュニケーションを図るために、全学的な取り組みを付加してきた。二〇〇六年度には、全学の共通の取り組みとして、シ

表1 お茶の水女子大学全学ピアサポートの概要と特徴（加賀美，2005）を改定

組織	設立年月	ピアサポートの特徴
文学部	2003年4月	主に、三月末から五月にかけて新入生の適応援助を目指し、講座ごとにボランティアで募集した先輩のサポーターが新入生の援助を行う。講座別に数名の教員がボランティアでアドバイザーとして関わる。ピアサポート研修会も行われている。
生活科学部	2004年4月	主に、学習支援を目指し、講座ごとに上級生が下級生に助言を行う。各学年の学生委員の選出、異学年の交流、就職・進路の助言をしている。講座の教員の代表が統括している。
理学部	2004年4月	主に、学習支援を目指し、学科ごとに上級生が下級生に（卒業生も含む）助言を行う。スーパーバイズ制を取り入れ教員が学生の個別指導、院生のTAの相談時間も確保し活用している。学科によっては卒業生による就職ガイダンスや講演会も行っている。
グローバル教育センター	2002年4月	主に、留学生が留学目的を果たせるよう学習面、生活面からの支援と国際交流を目指す。大学院生チューターによる相談室運営と日本語添削と情報提供、国際交流グループTEAの交流活動、国際学生宿舎メンターの生活面での助言が活動の中心である。年に二回相談室チューター研修会を行う。相談担当教員が全体のコーディネートをする。

ンポジウムを開催し、ピアサポート報告会や講演会を行った（加賀美，二〇〇七）。講演会ではピアサポートの実

践校の教員に講演依頼をした。また、シンポジウムでは、各学部や講座の個別の取り組みを報告し、それに関する意見交換が行なわれた。また、全学のピアサポーター研修会へ向けての企画や意見交換が活発に行なわれ、二〇〇八年には、学生と教員も共に学びあうピアサポート研修会も行なわれた。

さらに、ピアサポート・プログラム報告書は隔年ごとに発行されている。継続的に、第1号、第2号、第3号の発行を経て、徐々に個別の組織の独自性尊重を超えて、全学のピアサポートの取り組みを共通課題として、各学部等の代表委員により相互に学部等の情報を交換し共有している。こうした組織間のコミュニケーションの積み重ねが、ここ数年の全学ピアサポート・プログラムとその体制の成果であろう。

4. 実践例・留学生へのピアサポート

次に筆者が担当している、留学生支援のピアサポートの実践について取り上げる。

お茶の水女子大学の留学生支援は、コミュニティ心理学的アプローチによるものである。多様な部署の援助者が関わりあう留学生支援を担うシステム作りを目指してきた

め、ピアサポート活動は重要な核となっている。その理由としては、多様な文化背景を持つ二〇数カ国からの学生（約二六〇名）への個別のニーズに対応しつつ、多様性を尊重した支援は、限られた教職員で担うのは限界があるからである。また、国や文化によつては、個別の「心理相談」に対する偏見があり、精神科医や相談に来ること自体が自分自身へのダメージになってしまうと思ってしまう学生もいる。さらに、留学生の中には、すでに母国で大学卒業をし、職業経験を持っている学生も多いので、自尊心の高い学生は自発的に相談に来ることが難しいというのも理由の一つである。そこで、「接近しやすい」相談資源として、身近にいる仲間からのサポートは重要かつ有効である。つまり、ピアサポートはまず「身近な友達になる」こと、つまり「関係作り」が基本となる。

留学生にとつて、一番、援助が必要な時は、入国時である。新人留学生の異文化適応促進のためには、日本のことを熟知する日本人学生や先輩留学生からの情報提供が重要である。そういうニーズをもとに、大学院生チューターによる相談室活動、大学宿舍のボランティア・メンターによるサポート、国際交流グループTEAの活動は支えられている。図1は、その連携図である。

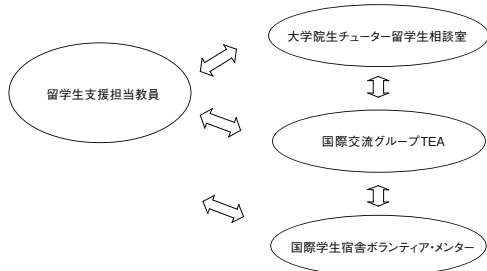


図1 ピアサポートによる留学生支援の連携図

(1) 大学院生チューターによる留学生相談室

大学院生チューターによる三〇年の伝統のある留学生相談室は、月曜日・金曜日一〇〇〇〇一七〇〇、チューターが常駐し、チューター長、チューター二〇名により代替で運営されている。活動は、おもに日本語添削（博士・修士論文、授業、レポート等）であるが、留学生のうちの二／三を大学院生が占めるため、論文添削は重要である。さらに、チューターたちは生活面での情報提供やパソコン



「留学生相談室の様子」

などの維持・管理をしている。教員の役割はチューターへのコンサルテーションで、メーリングリストで常に連絡しあっている。チューターが困ったときには、教員へ連絡することになっており、危機介入や個別相談を行い、指導教員と連携して指導したり、必要に応じて国際交流チームや保健管理センターなどと連携し、医療へつないでいる。

(2) 国際学生宿舎(大山寮)メンターサポート

大学宿舎では主に新入留学生のサポートを行っている。韓国、台湾、タイなどの先輩留学生の数名がボランティアとして、寮でのごみ捨てや病院や買い物などの紹介等、生活における情報提供や助言をしている。

(3) 国際交流グループ (TEA: Transcultural Exchange Association)

留学生と日本人学生との交流は何もしないままで放置していると、全く交流活動に繋がっていない現状がある。それは、大学の中に異文化間の友人形成をばむ要因がたくさんあるからである。たとえば、情報の壁(互いの存在を知らない)、環境的障壁(出会う場所、時間がない)、スキルの壁(言葉、トピック、接近の仕方)、心理的な壁(知らない相手への不安、遠慮、気おくれ、摩擦への恐れ)、文化的壁(価値観、宗教、コミュニケーション上の

戸惑い)などがある。そこで、教員が教育的介入を行い、学生同士の自発的で自由な活動の場を保障し、設定する必要性がある。

国際交流グループTEAは、二〇〇二年九月に日本人学生と留学生との交流促進を目指すために立ち上げたボランティア組織である。TEAメンバーは自発的な活動を考え、参加したい人が自由に参加できるような体制になっている。日常的なランチミーティングと企画行事の組み合わせが主な活動となっている。新入留学生の welcome party や帰国学生への送別会、各国の文化紹介交流会、微音祭、「留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム(交流合宿)」の準備、運営、報告書作成など行っている。教員は、企画行事の運営やリーダーの学生への助言などをしていく。

こうした異文化間の交流活動は、授業以外で、留学生と日本人学生が知り合える機会を提供することであり、学生同士が身近に関わることにより、言葉や文化の違い、接近方法の戸惑いなどの心理的な壁を乗り越え、日本人学生と留学生の相互交流を促進させる効果がある。そのことは、ピアサポートを自然な形で行うことにつながるものである。このように、授業以外で、留学生と日本人学生が知り

合える機会を提供することの意味は、学生支援としては非常に大きい。大学の中で、「援助する人と援助される人との固定された関係」を超越し、異文化交流を楽しみ、豊かな人間関係の構築の一助となっている。こうした活動は、身近なピアサポートが国際交流としても大学コミュニティへインパクトを与えていることを物語っている。

5. ピアサポートの課題

このようにピアサポートは、学生にとってアクセスしやすい優れた学生支援であるものの、学部間、組織間に共通して言える本質的な問題がある。それは、ピアサポートによる学生支援は、毎年、学生メンバーが変わるため、また、学生によって支援意欲や活動のコミットメントが異なるため、学生支援としての安定性に欠けることである。そのため、常時、教員やそれを取りまとめるコーディネーター（担当者）がその流動性や重要性を認識し、絶えず、今そこにいる学生を指導し続けなければ、ピアサポートは継続していかないということである。

さらに、危機介入の問題がある。相談を受けた学生が一人で解決できない時には、抱え込まないこと、より適切な専門家に援助を求めることを指導したり、指導教員や学生

支援チーム、学生相談室などしかるべき部署に「つないでいく」という連携体制を研修会等で指導し、共有し周知させていくことが重要である。つまり、最終的に、学生は責任をとることができないため、ピアサポートによる援助を取りまとめるコーディネーター（担当者）がとりわけピアサポートでは重要なのである。

以上の述べてきたとおり、お茶の水女子大学では何よりも「ピアサポートは学生による学生のサポート」であり、それを教員が支えていくという教育方略のもとで実践している。現状では、活動主体である学生が他の学生を援助しようという動機と援助を受ける学生のニーズを重視しながら、今後、学生へのピアサポートのあり方を教員と学生、



「毎年行われている留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム（八王子セミナーハウス）」

特集・ピア・サポート

学生同士で話し合いながら進めるとともに、組織間の活動における情報の共有と連携をしていくことが重要であると考ええる。また、全学的取組としての多様性を模索していくことも組織的に課題とされる。

参考文献

- お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム報告書 第1号
二〇〇五年三月発行
- お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム報告書 第2号
二〇〇七年三月発行
- お茶の水女子大学 ピアサポート・プログラム報告書 第3号
二〇〇九年三月発行